

三田 加奈 提出 学位申請論文

『東北伝承文学の研究』 審査要旨

論文の内容の要旨

本論文の目的は東北地方の伝承文学の本質を明らかにすることで、その先駆者は柳田國男の「東北文学の研究」にある。これに着想を得ながら、柳田の視野に入らなかった話題をも取り込みながら構想していく。具体的には、源義経の部下の常陸坊海尊伝説や奥浄瑠璃の末席に位置する『正法寺開山記』、語り物文芸『清悦物語』『鬼三太残齡記』などが対象となる。これらの伝説や昔話、語り物文芸を、東北の庶民がいかに享受し伝えてきたかを、生活の現場に密着して解釈、理解していこうとする。セミプロ的な語りや囲炉裏端の語りで、人々がいかにこうした文芸を愛好し、子や孫へ伝えてきたかの実態に迫るのが目的であるという。

本論文の構成は、最初に「序論」を置き、本論を「口承の世界」「書承の世界」に大別し、「口承の世界」をさらに「常陸坊海尊伝説の諸相」「仙台藩の語り物、昔話」に二分し、「書承の世界」も『清悦物語』の在地性』『鬼三太残齡記』の在地性」に二分して、それぞれに二本から三本の論文を配置するという体裁になっている。そして、末尾に「結論」を置き、そのあとに「翻刻資料」を二本収録する。

「序論」では、柳田國男の研究の特質を整理、確認し、本論文で話題とする『清悦物語』や『鬼三太残齡記』の目的と方法について確認し、また、『義経記』から民間伝承へと連なる海尊や、禅宗の影響下にある「正法寺開山記」などの論考の意図を記す。

第一部は常陸坊海尊の伝説を取り上げる。「海尊、白石翁と「仙人の碁」は、仙台藩白石領の阿子島家に寄寓していた白石翁を話題にする。阿子島一族は伊達氏に敗れ、仙台藩白石領の傘下となるが、なぜ白石翁を匿ったのかは不明である。仙台藩の儒学者の遊佐木斎や、『東藩野乗』が、老子の言葉を引いて賞賛

するところから、仙人のイメージに仕立て上げられる。その白石翁が『東藩野乗』では、武田家の家臣の曲淵正左衛門と将棋をしたという。中世末期の歴史人物と時代の異なる人物同士の将棋は、昔話「仙人の碁」に通じる。その白石翁が常陸坊海尊と並列して記録されるのは、儒学者の周辺で仙人的人物として評価されていたからで、林羅山以来の関わりがある指摘する。

続く「修験と儒者の海尊伝説」は、青森県下北半島の恐山にまつわる海尊伝説である。脇野沢、仏ヶ浦から恐山への道筋にある寄浪に「海尊社」があり、この浜の「子持ち石」を死者供養の霊場巡りの際に拾って帰る。安産祈願を組み込んだ海尊伝説には修験が関与するという。

一方、西の寄浪と反対の大畑町の恐山参拝ルートにも海尊伝説がある。曹洞宗寺院の大安寺や門前近くの住吉神社の修験が関わっている。海尊伝説には、大安寺の開山の和尚一東異寅も関係し、宮古の黒森山を大畑に勧請したという指摘は興味深い。その一東和尚は晩年、故郷の宮古の豊間根で即身成仏による入定を果たしたと伝えられる。三陸海岸から下北半島に至る海岸沿いには修験

と関係する海尊の足跡をたどることができると指摘する。

「変貌する海尊像」は、黄表紙の『駿河清重伊達紙子笈捨松』に描かれた海尊像を追ったものである。その人物像は修験が持っていた海尊イメージが大きく変貌して登場する。海尊は、義経主従の面影を残しながらも、諸悪を懲らしめる怪力といったスーパーヒーローに変身している。黄表紙は、義経の敵討ちをベースに、江戸の中期にあった百姓娘による仇討ち事件「奥州自石噺」を見立てに利用していると説く。さらに事件は実録体小説『慶安太平記』にも取り込まれ、ここにも別人の海尊が登場する。江戸の悪所である芝居等における海尊は、抑圧される都市民の願望を担った人物として、東北の修験が残した仙人像とは大きくかけ離れている。この二つの海尊像を対比させた点は、これまでの研究になかった独自の視点といえる。

第二部の「『正法寺開山記』と奥浄瑠璃」は、東北の曹洞宗本山と謳われた奥州市水沢区の「正法寺」に関わる語り物である。正法寺の開山である無底和尚の出生の由来を描いた『正法寺開山記』は、いわゆる曹洞宗通幻派が喧伝する

祖師通幻の出生由来に関わる物語であるが、通幻が無底と入れ替わっているところに地域事情がうかがわれる。『正法寺開山記』は奥浄瑠璃の形式の六段仕立ての物語構成に「伊勢参り」を取り込んで舞台化を目ざしたが江戸末期に舞台も廃れ、ついに口演の機会を失ってしまった。生と死の二つに引き裂かれ男女が結ばれるという「死後結婚」の習俗を取り込んだのは、地域がらという指摘は的確である。

「昔話」「幽霊女房」と通幻」は、語り物を昔話化した「幽霊女房」を取り上げ、曹洞寺院の布教の物語が降下したものはあるが、伝承分布は広範囲に亘っている。昔話の裾野や享受層が語り物よりも広いことを示しているという。

第三部『清悦物語』の在地性」は、「清悦物語」がどのように生成、享受されてきたかを論じたもので、最初の「仙北次郎物語」の語り手」は、『清悦物語』の三部構成の「仙北次郎物語」を話題にしたもので、高館合戦後の残党の捕縛を話題にしたものである。秋田城之助一族の系統を批判しているが、実は主人公が秋田実季であることが、小浜の空印寺近くの羽賀寺の縁起や書状から明らか

かになる。ここから秋田氏の本姓や系図へこだわり、そして「仙北」の「常陸房」とのつながりが見えてくるという。物語の書写にかかわる語り手の特定は優れた成果である。

「高館合戦物語」と津波」は、「高館合戦」の舞台が、平泉ではなく仙台藩の名取を舞台に構成されたのではないかという仮説を論証したものである。合戦中の「二度の津波」をヒントに、平泉ではなく名取における実際の津波をもとに物語が構想されたと分析する。直接の証拠に乏しいが、しかし、状況証拠の積み重ねからなる推論には説得力があり、今後の進展が期待される。

『清悦物語』と諸本」は、現存する『清悦物語』の諸本を整理・分類し、系統立てて、その全体像を明らかにしようとしたものである。写本の多くは南部藩や仙台藩に残され、奥浄瑠璃風の内容や高館合戦語りに主軸を置いていることから、この地の語りに関わる勢力が関与したと説く。

第四部の『鬼三太残齡記』の在地性」の二本の各論のうち、『鬼三太残齡記』と会津街道」は、『義経記』の「北国落ち」のコースとは異なり、『鬼三太残齡記』

では二手に分かれるが、越後から会津を抜けて平泉に到るコースを中心に置いた考察である。江戸期の越後から会津への街道は、地震によってルートが変更するが、その災害後のルートに従い、会津坂下の地を抜け、福島で佐藤兄弟の血縁と交渉する。作品の執筆の時期や『義経記』の記事を変えた事情等にも触れる。作品を歴史上に浮かび上がらせてとらえる手法は手堅い。

『鬼三太残齡記』の人物群は、高館合戦における和泉二郎忠衡をめぐる関係者の問題を取り上げる。『清悦物語』の「仙北次郎物語」とは違い、『鬼三太残齡記』に登場する人物群には、仙台藩と関わる人々も多い。また、杉目行信という身代わりを置いて義経が生きのびたとする、義経「蝦夷地渡航」を匂わせるのは、平泉を中心とした藤原氏や秀衡崇敬の念を反映したものととらえられるという。物語が在地の事情を汲み取るような形で構成されることは、伝承の物語形成を考える上で興味深い指摘である。

「結論」は全体の内容を整理し、本論文の達成を確認する。まずは伝説の常陸坊海尊像が二極分化する時代性、「正法寺開山記」や昔話「幽霊女房」が宗教と

娯楽と地域性と関わって伝承世界を構成している姿を確認できたとする。後半の語り物の世界は、「在地」という視点か物語をとらえることの意義を示したものと評価できる。

論文審査の結果の要旨

本論文は東北の根生いの庶民文学の追跡を志向する研究といえる。もう少し限定した言い方をするなら、江戸中期から近代という時代の、社会層でいえば自立した在地の文化愛好者たちの、文学のジャンルでいえば声を中心とした物語文芸の世界というところに集約できる。この輪郭の的確性はともかくとして、各論を横断して貫く統一的なテーマを「語り手」「宗教」「在地」といったコンセプトで把握し、この基点から本論文を評価することは可能であり、ここから総体的に論文の達成を論じていきたい。

当該論文を「語り手」からとらえる場合、その基本的な枠組みとして、語り

物の演者から囲炉裏に象徴される家庭内の語り手までを範囲に、口頭を手段とする口演の場を総体として把握しなければならない。本論文でいえば、語り物文芸である『正法寺開山記』『清悦物語』『鬼三太残齡記』の作者や写本の書写者から、海尊伝説の伝播あるいは記録に携わった者、また宗教的場での口述者、家庭内の語り手らが、それに相当するであろう。これらの語り手の活動から、その文芸や口承の伝説や昔話を照射し、その特徴を具体的に論じる必要がある。

義経をめぐる前述書の成立には、清悦、鬼三太あるいは海尊などといった人物は、その背景にどのような実体があるものか、各論考では語りのテキストの分析から伝承の地まで足を運び、状況証拠を積重ねて論じていく。青森県下北半島の海尊伝説の痕跡から脇野沢、大畑を訪ね、修験が関わっていたことを、その宗教的活動を通して明らかにする。特に大畑の大安寺では、開山の一東異寅が岩手県宮古の黒森神楽の聖地とされる黒森山を大畑に勧請したという伝承を指摘しており、修験と海尊伝説を結びつける根拠としての信憑性が高い。

一方、ローカルな海尊伝説だけでなく、江戸の黄表紙の海尊像等に触れたのは、

共時的人物像を抽出する上で重要な視点である。「駿河清重 伊達紙子笈捨松」に登場する妖魔性に彩られた海尊は、同時代としては異質な造型である。江戸の都市の草双紙作家がとらえる海尊は、在地の伝説が新たに飛翔する姿であり、ダイナミックな伝説研究を予見させるもので、その先見性は評価されてよい。

続くキーワードの「宗教」に視点を向けるなら、薄いネットワークで地域との関係を深めようとする修験に対して、支配権力のバックアップのもとに地域に勢力を張りめぐらす寺院勢力の中で、民間伝承に深く関与するのが曹洞宗正法寺である。その開山である無底良韻の縁起である『正法寺開山記』は、曹洞宗通幻派の僧侶が形成に関与したと想定される。「幽霊女房」の昔話としても伝承されるが、「死霊結婚」という習俗を基軸に、社会的な関心の強い「伊勢参り」を添えた物語展開は、浄瑠璃上演を意図しての創出といえる。これに曹洞宗が関わるのは、土着的信仰を包摂し浸透を図る戦略であることを本論考では明らかにしている。

また、幕藩体制の思想的基盤である朱子学を中心とした儒教も、海尊をめぐっ

て民間伝承と深く関わる。『東藩野乗』に清悦と並び紹介される「白石翁伝」の翁は、風貌や振舞挙動において道教的仙人として描かれる。この白石翁に傾倒、賛辞を贈るのが、他ならぬ仙台儒員の遊佐木斎である。林羅山の傾倒に連なる儒学者には孔子が否定した「怪力乱神」に踏み込んでいくことを本論文では明らかにしている。曹洞宗も儒学者も、支配の一環として在地の人心の掌握に心がけているという見解は明察である。

三番目の「在地」については、少し説明が要る。この語は伝承文学では都市の文化メディアに対し、一昔前のローカルメディアにもとづく文化の生成や伝承の場という含意がある。具体的には本論文で取り上げる語り物などを生み出す地域環境のことをさすと解されよう。『義経記』の最後の高館合戦以後の「在地」の伝承が『清悦物語』『鬼三太残齡記』であり、『正法寺開山記』もそれに該当しよう。舞台が在地であり、物語内容がその地域性を強く主張することに特徴がある。『清悦物語』では奥州征伐に関わり、「仙北次郎物語」の主人公が誰であるのか、在地における歴史認識の力学が働くことになる。「仙北次郎物

「語り手」では、「秋田城ノ助」の行方を追う。また、『鬼三太残齡記』では、義経が蝦夷地渡航を匂わせるが、これは江戸中期ごろの仙台藩の平泉地方の事情が、秀衡敬慕をも含めて忖度されるはずである。本論文はそうした地域の動向を鋭敏に追究している点が大きな成果といえよう。

以上、東北の伝承文学についての本論文の評価すべき点を、「語り手」「宗教」「在地」視点から説明してきたが、当然ながら批判すべき欠点や課題もある。本論文は独自性を主張する余り、勇み足に近い部分も見られる。その一つに「高館合戦」における津波」が上げられる。平泉の高館合戦に二度の津波の襲来は考えられないので、その舞台を名取の高館に比定した発想は興味深いが、その論証に伊達政宗の統治の失策を上げたのは少し結論を急ぎ過ぎた印象がある。当地での語り物の生成過程を、資料等によって粘り強く追究する必要がある。もう一点、本論文の「序論」で、柳田國男の「東北文学の研究」を紹介したところで、物語の形成に「山伏修験」と地元の「家を愛しまた祖先を思慕する」人々のことを挙げているが、この物語を育む「一族」「家」の吟味が本論文では

欠けてしまったようである。この問題はかつて、小池淳一が義経の借用書なる偽文書を家や先祖の権威として語ると説いた事とも関係し、ぜひともその後の研究を示して欲しかった。義経と海尊とは違うという見方もあるが、ならばその違いの説明が必要である。

他にも若干の瑕疵は散見されるが、全体としては本論文が到達し、示した大きな成果に揺るぎはない。書物やフィールドワークによる緻密な調査による資料収集や論文構成、問題意識、結論等も順当であり、本論文の提出者である三田加奈は、博士（文学）の学位を授与される資格があるものと認められる。

令和二年十二月十九日

主査	國學院大學教授	花部 英雄	㊞
副査	國學院大學教授	大石 泰夫	㊞
副査	国立歴史民俗博物館教授	小池 淳一	㊞

三田 加奈 学力確認の結果の要旨

左記三名が各専門分野からそれぞれ学力確認の試験を行った結果、博士(文学)の学位を授与される学力があることを確認した。

令和二年十二月十九日

学力確認担当者

主査	國學院大學教授	花部英雄	印
副査	國學院大學教授	大石泰夫	印
副査	国立歴史民俗博物館教授	小池淳一	印